

---

〈シンポジウムを受けて〉

## 専門学部教員の立場から

小泉 哲夫

---

30年ほど前に私もいわゆる一般教育を受けたのだが、ごく少数の科目を除いて何を習ったのか思い出せない。生意気にも大学に入ったばかりの私は、専門のみしか見ない狭い視野の持ち主になるまいと思い、一般教育に総合的な視野を得ることを期待していたと記憶する。私が怠け者なのか、授業が期待に沿わないものだったのか、私ができるような広い視野の持ち主になったとはとても思えない。考えて見れば知識を“総合”することは言うほど簡単ではない。下手をすれば単なる知識の食い散らかしに終わってしまう。そもそも科学というのは知識のみならず、その論理や思考方法が大事なだから一つの専門を深めれば、ある程度他の分野にも応用がきくはずではないのか。

20年ほど前に立教の理学部に来てからも一般教育の方々とはほとんど交流もなく、教授会でも一般教育の問題が取り上げられることはほとんどなかった。そのような状況が続いていたときに、一般教育部の解体、全学共通カリキュラムのスタートとなったわけである。私はここ数年、自然科学教育研究室の室員をやったり、今年度からは全

カリ運営センターの委員になったり、全カリにかなりかかわるようになり、総合教育科目のカリキュラムについて考えざるを得なくなってきた。専門学部に所属していたものは自分で全カリ科目を持つか、全カリ関係の委員になるかしなければ、なかなか全カリについて身近な問題として考えようとはしないものである（そうでないという方には失礼）。理学部でも全カリの授業担当者や委員の経験者が増えてきて、全カリの問題が共通のものとしてとらえられてきつつあると思われる。どなたかが“全学共通カリキュラムは単にカリキュラムの問題ではなく、大学における一種の運動である”という趣旨のことをおっしゃっていたが、あまり自発的ではないにせよ、そのような運動が全学に広がっているのは事実であろう。

私は一般教育もしくは総合教育に造詣が深いわけでもない、ごく平均的な専門学部所属の教員だと思う。次に述べるのはそういう教員の私見だと思っていたいただきたい。

## <学部教員が総合でできること>

私はまだ全カリ科目を担当したことはない。ただ近い将来に担当することになるであろう。では私が全カリの科目を担当して何ができるか。現在担当している方に話をきくと、なかなか大変そうである。いわく人数が多くて大変だ、簡単な数式を書いただけで拒絶反応が起きる、等々。理学部の講義で受講生が100人を超えることはめったにないし、一応専門を勉強したくて受講しているはずだ。総合教育科目では文系の学生が主であろう。総合教育科目で自分の専門としている具体的な研究のことを、たとえ易しくかみくだいても話はまず通じないだろうし、そんなことが期待されているわけでもない。

今回のシンポジウムでは社会学部の木下先生がそのへんのことをうまく整理されていた。第1に他学部の学生に自分の専門としている領域について伝えるという視点、第2に他学部学生との出合、第3に自分の専門領域を外側から確認するということ。私もまずはじめに第1の点を考える。現代社会では環境問題、エネルギー問題など文系学生にも初歩的な自然科学の知識は不可欠だと思われる。ただ知識以上に私が伝えたいのは自然科学の思考方法である。自然科学の論理や思考方法は自然科学のなかだけに閉じこもるものではなくもっと普遍性をもっているはずだ。その辺のことがうまく伝わればと思う。まあこれは口でいうほど簡単で

はないが。第一自分がそれをどこまで理解しているか、良く考えると疑問になってくる。

第2、第3の点は学生というよりも教える教員の側の利点という気がする。ノーベル賞を受賞した物理学者ファインマンがある物理の理論を学部学生（もちろん理系の学生）に講義して“うまく講義できなかった。自分でも良く理解していなかったからだ。”という趣旨の事を言ったという話がある。専門ではない学生に自分の専門領域の事を話す時にいかに本質を易しい言葉で伝えられるか。これは確かに本当に自分が理解していなくてはできないことである。さらに自分の専門領域が他学部の学生に、もっと広くいえば社会の中でどのような意味を持つかという事を意識せざるを得なくなる。

こう考えると総合教育科目を持つというのは常に教員が試されているようなものである。なかなか大変なことである。常にこんな事を考えていては授業が展開できなくなるので、適当なところで妥協するということになるのだろうが、それにしてもかなりの負担になりそうだ。他学部学生との出合という利点と、負担の大変さ、これをどの辺でバランスを取るか、大きな課題になりそうだ。

## <総合と専門>

全学共通カリキュラムがスタートし、旧一般教育所属の方々が分属されてきた。私は自然科学教育研究室員や運営

委員をやったので、旧一般の方々と話す機会も増えた。話していると旧一般の方と総合教育科目に対する捉え方に多少の違和感を感じることがある。昨年のフォーラム4号にも数学科の木田先生が同じ様なことを書いておられるので、もともと専門学部にも所属している教員にはある程度共通するものなのかもしれない。授業することに積極的である、特に総合教育科目の拡充に熱心である、などなど。これはどこに力点を置いているかの違いだと思う。単純な二分法が必ずしも正しくはないと思うが、あえて単純化すれば専門科目と総合教育科目とどちらに力点を置くかの違いなのだと思う。私の立場はこの様な二分法を取ればやはり専門重視と答えざるを得ない。これも昨年木田先生が寺崎氏の言葉として紹介されているが、“専門をもった教養人”か“教養をもった専門人”かということが簡潔にこの関係を表わしていると思う。私も木田先生同様、教養をもった専門人を育てることを選ぶ。専門学部に入學してきた学生はその専門領域を選択してきた学生である。その様な学生にはやはり十分な専門教育をしてやりたい。学部学生に対しては専門をもった教養人で充分、本格的な専門教育は大学院で行うという議論があり、それにも充分な論理はあると思うが、私は専門重視の立場をとりたい。

総合科目が重要であるということに異論はない。しかしながら、総合科目を重視しすぎて専門の空洞化が起こる

ことは避けたい。総合科目が重要であるということに異論をはさみにくいので、総合科目の議論をしているとあれも大切、これも重要とどんどん科目数が膨らんでいく危険がある。科目の厳選ということがシンポジウムでも話題になったし、今回のカリキュラム改訂にも盛り込まれているのはありがたいところである。

### <全カリ科目を利用する>

前に教員が他学部の学生に講義することについて考えたが、逆に自分の専門学部の学生にとって総合教育科目はどんな意味を持っているのか考えたい。前にも述べたが、専門を勉強するより“総合”をすることのほうが難しいと私には思われる。専門をしっかり勉強すれば、あとはごく少数の基本的なことだけ学習すれば良し、総合化は自分でやりなさいという考えにかなり魅かれるものを感じるが、現実をみればそんなことのできる学生はまれである（だいたい専門教員がそれができているか疑問であるが）。またそんなことのできる学生は教師が何か言う必要はなく放っておけばいいのである。では残りの多くの学生に総合教育科目をどのようにとらせるか。私は専門重視という立場から、全カリの理念には反するのかも知れないが、専門科目をより良く理解するために全カリを利用するということを考えたい。これは専門の入門的科目を全カリで展開しようとい

う意味ではない。専門科目が学問全体の中で占める位置、社会の中での専門の意味といったようなことを学習させることを総合教育科目に期待したい。たとえば物理学を世界認識の一手段と捉えれば、哲学は不可欠になるし、社会における技術との関係で捉えれば、経済学の視点が重要になるだろう。

理学部では学部・大学院前期課程一貫教育の方向でカリキュラムを考えている。しかしながら立教大学は東大と違うので、半数以上の学生は学部で卒業する。大学院に進学する学生はもちろんだが、むしろ学部で卒業する学生に教養をもった専門人になってもらうためには大いに総合教育科目を利用させてもらいたい。専門の基礎は専門学部が徹底的に行う。そのより深い理解のために総合教育科目を学習する。そのためにはまったくの私見ではあるが、たとえば“物理学をより良く理解するための総合教育科目”の様な履修モデルを作っても良いのではないだろうか。今回のカリキュラム改訂に当たっては履修モデルの導入が検討されているようであるが、運営センターで設定するテーマ別のモデルのほかにも、専門学

部が提示する履修モデルがあっても良いと思うが。

現在の総合のカリキュラムを見るとこのような要望に答えるようなものになっているかは大変疑問である。旧一般教育科目に引きずられている部分がかかなりあると聞いている。まだカリキュラム改訂は外枠のコマ数や、展開方針の議論のみで、カリキュラムの中味についてはこれからということのようである。これまで総合教育科目の中味について各学部からこのような科目を展開してほしいというような要求はあまり出ていなかったように思う。

今回の改訂では学部横断的な科目の設置や、各研究室に広い学部から室員を入れるという方向が確認されているが、このような改革で各学部の要望が取り入れやすくなると期待している。ただこうなったらこうなつたで、構想小委員会の運営は大変になりそうですね。運営委員としてはつらいところです。

(こいずみ てつお 本理学部教授  
全カリ運営センター研究開発広報委員)